

緑の言説が放つ異臭

—Dana Phillips, *The Truth of Ecology* を読む

結 城 正 美

自然・環境をめぐる〈緑の〉視点を文学研究に導入するエコクリティシズムは、1990年代初頭のアメリカで確立された〈新しい〉文学批評理論である。にもかかわらず、エコクリティシズムにはフレッシュな芳気どころか「カビの生えたイチジク」のような異臭が漂っていると Dana Phillips は指摘する (IX)。この気鋭の批評家によれば、腐敗の原因は、エコクリティシズムが文学批評理論にまで発展しないまま成長が止まってしまっていること、および、それに対するエコクリティックの楽天的無自覚にあるという。きわめて好戦的な態度で批判を展開するフィリップスは、しかしながら、エコクリティシズムを否定しているわけではない。この批評分野の理論的停滞を批判しているのである。じっさい、*The Truth of Ecology* で試みられているのは、この十数年間に緑の批評言説を構築してきた理論的基盤の脆弱さの徹底検証と、それにもとづくエコクリティシズムの「再発見、複雑化、再定義」にほかならない (IX)。これまでに夥しい数の研究者と研究書を生み出しつつ発展してきたエコクリティシズムは、フィリップスによって現代文学批評理論の俎上に相対的に布置されることにより、たとえば批評実践の際の了解事項とされている〈自然・環境との共生〉や〈相互関係にもとづく調和〉といったモチーフの不透明さや、エコロジカルな状態に判断基準を求める批評スタンスの危うさが暴かれることとなる。*The Truth of Ecology* の趣旨は、そのようなエコクリティシズムにおける共有見解・概念・批評スタンスの欠陥—異臭の原因—を指摘しつつ、この批評分野の理論的成熟を強く要請するという点に集約される。

フィリップスが指摘するエコクリティシズムの致命的欠陥は、大別して次の3つに要約できる。テキストと現実世界との混同、理論への抵抗、そしてエコクリティックの認識論的＝非批判的批評実践である。本稿では、これらの互いに補強しつつ関連している問題点を批判的に検証するフィリップスの見解をさらに批判的に考察することにより、エコクリティシズムの理論的マトリックスへの接近を試みたい。

1. エコクリティシズムのリアリズム

テキストと現実との乖離はいまや現代批評理論では一般常識とみなされている。しかしながら、わたしたちが現実だとみなしているものはすべて社会的・言語的構築物だとする脱構築主義的パラダイムが孕む問題を批判的に見据える視座が、エコクリティシズムには内在する。すなわち、テキストと現実、概念と事実の齟齬を自明視する態度が現実軽視を、エコクリティシズムの文脈にひきつけば環境をめぐる問題への無関心を招来してはこなかったかと、エコクリティシズムは問うているのである。

エコクリティシズムにおける現実世界への関心の強さは、「文学と物理的環境との関係をめぐる研究」というよく引かれるこの批評理論の定義をみれば一目瞭然であろう (Glotfelty xviii)。エコクリティシズムは文学批評理論のひとつであるが、批評的関心の中心を占めるのは文学テキストではなく、テキストと物理的環境との「関係」である。言うまでもなく、テキストと物理的現実との関係という問題は、すべては社会的・言語的構築物であり客観的現実などというものは存在しえないとする見解のもとでは、考察の対象とならない。たとえば、テキストで「木」と表現されているものは物理的に存在する木とはまったく別物であり、また「木」が木を想起させるとしても、木として知覚されるものは知覚者がもつ社会的約束事のフィルターを免れることはできない、という具合に。だが、あるいは、だからこそ、エコクリティシズムは「人間文化は物理的世界と結びついており、互いに影響しあっている」という認識を「基本的前提」とし (Glotfelty xix)、木という物理的存在と人間社会が何らかの関

係のもとにあるという見地に立つ。単純化をおそれずにテキスト中心主義的見解に対するエコクリティックの見方を要約すれば、次のようになるだろう—物理的現実には注意を払わないテキスト中心主義により、文学研究の「エゴ＝コンシャス」は肥大化し、その結果、文学研究は女性問題や人種問題といった人間に関わる諸問題には対応しても、自然・環境という人間社会以外の問題（環境問題はもちろん人間社会に大きく関わってはいるが）に関心を向ける「エコ＝コンシャス」を持つに至っていない、と（Love 参照）。

だが、テキストと物理的現実との乖離は果たしてエコクリティックが騒ぎ立てるほど大きな問題だろうか、また、文学研究は彼らが主張するほど「エゴ＝コンシャス」だろうか、とフィリップスは問う。後者に関して彼が論ずるところによれば、現代文学批評理論ではエゴすなわち自我はもはや批評対象としては死語同然であり、自我中心主義に文学研究の瑕疵を見出すエコクリティックはアナクロニズムに陥っている、ということだ（136-37）。これは言葉尻を捕らえた反論であり、訂正が求められねばならない。意味と語感の点でエコ＝コンシャスとの対照が鮮烈なエゴ＝コンシャスという用語は、この言葉がエコクリティシズムの特徴を語るものとして普及する契機となった（そしてフィリップスも参照している）Glen A. Loveの論文“Revaluing Nature : Toward an Ecological Criticism”を一読すれば、決して自我を問題化しているわけではないということは明らかだ。ラブの言うエゴ＝コンシャスとは、人間社会に直接関係のある問題のみに批評的関心を向ける文学研究の人間中心主義（anthropocentrism）とほぼ同義であると言ってよい。エゴ＝コンシャスに関する反駁にみられるように、フィリップスのエコクリティシズム批判は多くの場合、この緑の批評言説が陥っているアナクロニズムに向けられている。後述するように傾聴すべき重要なポイントも提起されるが、「エゴ＝コンシャス」に関しては彼の議論は粗雑だと言わざるを得ない。

もう一つの点、すなわちテキストと現実との乖離を疑問視し、テキストを媒介とした現実回帰さえも提唱するエコクリティシズムのリアリズムにも、フィリップスは時代錯誤的批評精神を見出している。フィリップスによれば、エコクリティックは「文学と物理的環境との関係」をめぐる研究を、文学テキスト

と物理的環境とを有機的に結びつけることだと誤解しているらしい。フィリップスが誤解とよぶエコクリティックの見解は、先に引用したこの批評理論の「基本的前提」-「人間文化は物理的世界と結びついており、互いに影響しあっている」-によって正当化されており、エコクリティックの間では問題に付されることはほとんどない。先述した木の例をとれば、テキストにおける「木」という言語表象と物理的存在物としての木のあいだで互いに作用している影響を指摘することにより、木という物理的存在をめぐる読者の感性の向上に貢献する-エコクリティックの主張をフィリップス風に要約すればこのようになるだろう。これはじっさいそのとおりで、大著 *The Environmental Imagination* によってエコクリティシズム界の代表格となった観のある Lawrence Buell も、“All major strains of contemporary literary theory have marginalized literature's referential dimension by privileging structure, text(uality), ideology, or some other conceptual matrix that defines the space discourse occupies apart from factual ‘reality’” (86) と述べ、現代文学批評理論の主流傾向が周縁化してきた言語の指示的 (referential) 側面が現代環境観の変革に対して持ちうる効果のほどを強調している。それに対してフィリップスは、ビュエルの議論を槍玉に挙げつつ、物理的世界に読者の目を向けさせたいのであれば文学にではなく各人が世界へ直接向かえばよいのではないか、また物理的環境への関心を高めることがエコクリティシズムの狙いだとすれば、これは文学批評理論というよりは「現実回帰」の信仰にほかならない、と反駁する (Phillips 7, 163)。

文学と環境との関係をめぐる二つの見解をいまいちど整理しておこう。ビュエルに代表されるエコクリティックは、文学テキストと物理的環境とが「互いに影響しあっている」という見解のもと、言語の指示性が現実世界へと読者の意識を向ける機能をもち、それによって環境をめぐる想像力が高められると主張する。一方、フィリップスは、言語表象と現実とのあいだに有機的関係を見出すことは、表象と現実 (現前) を混同すること-「文学テキストに木が存在すると主張すること」-にほかならず、その場合、想像力が介在する余地はなく、結果的に批評の不可能性を招くと論ずる (9)。果たしてフィリップスが

言うようにエコクリティックが「文学テキストに木が存在すると主張」しているかどうかははなはだ訝しいが、ビュエル、フィリップスともに「想像力」を問題化している点は興味深い。ビュエルは文学研究のテキスト中心主義が想像力を環境へ向けることを阻んできたと言い、フィリップスはテキストと物理的環境を結びつけることが想像力の排除をもたらすと言う。つまり、テキスト中心の批評理論における想像力のあり方をめぐって、まったく異なる見解が提起されているのである。

環境に向けられる想像力とテキストが想起する想像力。果たして、これらは一見そうみえるほど対立的なのだろうか。私には、両者が同じものをそれぞれ異なる側面から表現しているように思えてならない。ビュエルのいう環境をめぐる想像力はテキストによってまず想起されるものであるし、フィリップスのいうテキストをめぐる想像力が自然・環境—社会的・言語的構築物であれ、エコクリティックが物理的現実とみなすものであれ—に向けられることは十分に考えられる。テキストを読むことにより刺激され、深化する想像力、これにどの角度から光を当てるかによって見解の違いが生じているのではないだろうか。たしかに、フィリップスが示唆するように、エコクリティックのいう環境へ向けられる想像力が、環境の問題にコミットする精神と二重写しになる場合、それは想像力というより信仰に限りなく近いものとなる。そうなったときエコクリティシズムは文学批評理論ではなく「宗教的熱狂」と化すという彼の指摘には、エコクリティックは厳粛に耳を傾けるべきであろう(163)。エコクリティックを文学批評界における自然・環境「ファンクラブ」とみなす向きがあるのであれば、なおさらである(138)。

2. 理論への懐疑

フィリップスの見解では、文学研究における理論偏重への懐疑も、エコクリティシズムの理論的停滞に関与している。そもそもエコクリティシズムには、理論的基盤を従来の文学批評理論への懐疑にもとづいて発展させてきたという経緯がある。環境問題が深刻化の一途をたどり、全世界的な関心を集めていた

20世紀末、文学研究は環境の問題にまったく対応していないという自省的認識のもとで生まれたエコクリティシズムには、文学研究における現実問題への無関心の原因が理論偏重にあるとする見方が内在する。エコクリティシズムが志向するとビュエルが言う「環境をめぐる想像力 (the environmental imagination)」にしても、「文学理論の資源を利用しながら文学表象の限界を明らかにし、文学理論の前提を疑ってみる」ことを促す作用が見込まれており (Buell 5)、エコクリティシズムを既存の文学批評理論の枠組みで規定することへの牽制の強さがうかがえる。このようにエコクリティシズムを文学批評理論という制度への挑戦とみなす見解は、フィリップスも共有しており、エコクリティシズムの理論的成熟のためには文学批評理論の準拠枠そのものを再構築する必要があるとの認識を示している (XII)。ただし、フィリップスの場合、エコクリティックによる理論偏重批判は理論軽視と映っているようで、理論や学問を「格好のスケープゴート」とし自らを正当化するエコクリティックの「怠惰な思考」に糾弾が向けられている (144, X)。フィリップに限らず、エコクリティシズムにおける理論への懐疑を自己満足的な理論的未成熟ととらえる向きは、じっさいエコクリティック内部にも存在する。エコクリティシズムが目指す理論的再構築は、理論とは何かという根本的問題の議論から着手される必要があるようだ。

理論的再構築に向けたエコクリティシズムの取り組みのひとつに、学際性 (interdisciplinarity) - 文学研究と他の学問分野 (disciplines) との関係性 (inter) の構築 - がある。この点については別稿で論じているので、ここではごく簡単に触れる程度にとどめておきたい。エコクリティシズムの別称エコロジカルな文学批評 (ecological literary criticism) に明らかのように、緑の批評言説が理論的基盤に取り込もうとしている領域には、まずエコロジー (生態学) がある。無論、エコロジーに限らず、環境の問題に関わる諸領域 - 地質学、アート、音楽、社会学、建築学など、自然科学・人文科学を問わずあらゆる領域、そして学問的領域だけではなく日常の生活界も - と文学研究を有機的につなげてゆくことが試みられているわけだが、深刻化する環境破壊が背景にあることもあって、エコロジーへの関心が強いことは事実だ。

ところで、学際性を特徴とする批評実践とはどのようなものなのか。エコロジーを例にとってフィリップスが論ずるには、エコクリティシズムの学際性は、せいぜい「エコロジーから借用した語彙にもとづく譬喩のレベルにとどまっている」(IX)。しかも、エコクリティシズムで頻繁に用いられる自然との共生や調和といった概念は、生態学的研究を無視した都合のよい曲解—「誰もが知っているエコロジーの高潔なイメージ」にもとづいている、という(45, 143)。さらに、文学テキストにおける生態系との構造的類似性—ここでも「エコロジーの高潔なイメージ」が関与しているわけだが—を賞賛する傾向がエコクリティシズムに存在することを指摘し、フィリップスは、これこそ理論化の回避であり「怠惰な思考」のあらわれにほかならないと示唆する(138)。学際性を標榜しながら他領域の研究をまともに知ろうともせず、環境文学の賞揚に終始するだけでは批評とは言えない、という今にも聞こえてきそうな彼の声は、エコクリティシズムの一側面を的確にとらえた重要な警告として聞き入れられるべきだろう。

フィリップスの批判の矛先は、理論と実践を対立的にとらえる傾向にも向けられている。エコクリティシズムにおける実践には、読者の意識を環境に向けること、そしてそれにもとづく環境とのよりよい関係(「よりよい関係」を具体的に説明することは容易ではないが)の構築があげられる。本稿で既に何度か言及している「環境をめぐる想像力」も、読者の想像力を環境へと導く点で理論よりも実践とより密接な関わりをもつと言える。エコクリティシズムの実践には、フェミニズム批評やポストコロニアル批評と同様、社会変革志向、すなわち批評をとおして個々人および社会の環境への態度を改善する意図がある。しかし、修正主義的立場という点ではフェミニズム批評など他の批評理論と共通するものの、それらがニューヒストリシズムや脱構築主義といった現代批評理論の主流傾向との緊密な結びつきのもとで独自の理論を発展させているのに対し、エコクリティシズムはそのような主流理論に抵抗している点で決定的に異なる、とフィリップスは論ずる(139)。先述したテキストと現実との乖離をめぐる問題にうかがえるように、たしかにエコクリティシズムには「すべてはテキストである」とする見解への反発がみられる。しかし、それは単なる反発

なのか。それとも、デュエルが「環境をめぐる想像力」の機能として説明しているように、「文学理論の資源を利用して文学の表象の限界を明らかにしながら、文学理論の前提に疑問を投げかけること」なのか（5）。言い換えれば、理論に対する抵抗なのか、それとも新たな理論を志向する創造的行為なのか。どちらの見解を取るかによって、エコクリティシズムにおける実践をめぐる、それが理論と対極的なものなのか、あるいは理論の再構築に不可欠な要素なのか、まったく対照的な見方が可能になるだろう。

エコクリティシズムの理論化はどのように進められるべきなのか。フィリップスが主張するように、エコロジカルな要素（と曲解されているもの）をもつ文学作品を賞揚するという「主題への献身的態度」は見直す必要があるだろう（240）。批評・分析の対象であるテキストが〈自然と調和した生活〉をテーマとし、〈自然との持続可能な関係〉を主張しているとしても、それを賞賛すること—さらに言えば賞賛だけに終始すること—は批評とは言えない。そして、*The Truth of Ecology*で具体例をもとに詳述されているように、エコクリティシズムにそういう面があることは否めない。「エコロジーの高潔なイメージ」に照らした作品賞賛はいかにも単純であるだけに目につきやすい側面ではあるが、私の印象では、それはエコクリティシズムのほんの一角を占めるにすぎない。とはいえ、重箱の隅を突くようなフィリップスの議論が必ずしも間違いではない以上、彼の指摘にはエコクリティシズムにおける楽天的無自覚を矯正する効果が期待できると言えよう。

3. エコクリティシズムの信仰

フィリップスによれば、エコクリティシズムが理論にまで発展しえないのは、自然・環境という関心（それが文学的であれ何であれ）の対象に挺身するばかりの批評家のスタンスにも原因がある。エコクリティシズムの理論化のためには、認識論的問題ではなくプラグマティックな問題に関心が向けられなければならないというフィリップスの主張はもっともである（7）。エコロジカルな要素を備える作品を善しとするスタンス、さらにはエコロジーに道徳的判断基

準を求める姿勢は、多少なりともエコクリティシズムに見出しうる。しかし、何が良くて何が悪いという問題にとらわれている限り、エコクリティシズムの理論的発展は見込めない。「環境をめぐる想像力」を読者の内に喚起すること—それによって環境の問題の改善に貢献すること—を究極的な目的とするのではなく、「だから（文学批評理論として）どうなのだ」と問わなければならない。そうでなければ、フィリップスが揶揄するように、エコクリティックはある種の宗教団体と何ら変わらなくなってしまう。

おもしろいことに、エコクリティシズムを批判する際にフィリップスが用いることばには、信仰や宗教的熱狂といった宗教を連想させるものが少なくない。彼の目にはエコクリティックが自然・環境に帰依する殉教者のように映っているのであろう。あるいは、そのようなエコクリティックの批評言説・実践のみを検討の対象としているのであろうか。*The Truth of Ecology* 冒頭において、彼は、“[ecocriticism's moment of origin] takes the form of epiphany: of a discovery, of a renewal, of faith in all things green” と嘯き（3）、エコクリティシズム＝信仰という図式を提示しているが、これは本書全体における彼の議論の枠組みとして機能しているように思える。もしそうならば、フィリップスのエコクリティシズム批判は、主にエコクリティシズム＝信仰という構図が成立する場合にのみ意味を成すと考えられる。

The Truth of Ecology における批判的まなざしは、多くの場合、エコクリティシズムというよりは、この批評理論の最も〈胡散臭い〉側面に向けられているようだ。だとすれば、エコクリティシズが放出する異臭の原因が検証されても、「だからどうなのだ」という釈然としない感じが残るのは当然であろうか。

引用文献

Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge: Harvard UP, 1995.

Glotfelty, Cheryl. “Introduction: Literary Studies in an Age of Environmental Crisis.”

Glotfelty and Fromm. xv-xxxvii.

---, and Harold Fromm, eds. *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology*. Athens:

U of Georgia P, 1996.

Love, Glen A. "Revaluating Nature: Toward an Ecological Criticism." Glotfelty and Fromm. 225-40.

Phillips, Dana. *The Truth of Ecology: Nature, Culture, and Literature in America*. New York: Oxford UP, 2003.

結城正美「エコクリティシズムー文学と環境のインターフェイス」『異文化コミュニケーション論集』（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科紀要、2004年3月刊行予定）